洋１３－１４

「ゼロ・ダーク・サーティ」　*****

２０１３（平成２５）年１月２４日鑑賞＜ＧＡＧ試写室＞

監督・製作：キャスリン・ビグロー
マヤ（ＣＩＡイスラマバード支局ビンラディン追跡チーム情報分析官）／ジェシカ・チャスティン
ダニエル（ＣＩＡイスラマバード支局ビンラディン追跡チームリーダー）／ジェイソン・クラーク
パトリック（シールズ隊員）／ジョエル・エドガートン
ジェシカ（ＣＩＡイスラマバード支局のマヤの同僚の分析官）／ジェニファー・イーリー
ジョージ（ＣＩＡテロ対策センター　アフガニスタン、パキスタン部チーフ）／マーク・ストロング
ジョセフ・ブラッドリー（ＣＩＡイスラマバード支局長）／カイル・チャンドラー
ラリー（ＣＩＡイスラマバード支局・現地チームリーダー）／ユドヴァー・ラミレス
レオン・パネッタ（ＣＩＡ長官）／ジェームズ・ガンドルフィーニ
スティーブ（ジョージの部下）／マーク・ブラゼウス
ウサーマ・ビンラディン／リッキー・セコン
２０１２年・アメリカ映画・１５８分
配給／ギャガ

＜あの女性監督が、またすごいテーマで挑戦！＞

私は、イラク戦争における爆発物処理班の活動に焦点を当てた映画『ハート・ロッカー』（０８年）の監督が女性監督のキャスリン・ビグローと聞いてビックリするとともに（『シネマルーム２４』１５頁参照）、ハリソン・フォード既長の演技が光った「Ｋ－１９」（０２年）（『シネマルーム２』９７頁参照）も同監督の作品に確認して二度ビックリした。そんな「社会派」女性監督のビグローが、何と２００１年９月１１日に発生したアメリカ同時多発テロ事件の首謀者とされるオサマ・ビンラディンを追いつめ、殺害するに至ったというタイムリーな現実の事件に真正面から映画で挑戦！

プレスシートによると、ビグロー監督は２００６年からトラボラで失敗したビンラディン捕縛作戦についての映画を企画し、２０１１年からその製作に入ったが、同年５月１日のネイビーシールズによる捕縛作戦決行のテレビでビンラディンが殺害されたためその企画は ボツになり、一から やり直すことになった後に本年の公開作になったというからすごい。映画づくりには膨大な資金が必要だが、本作は関係者へのインタビューを含め、気の遠くなるような取材活動を重に製作されたものだ。

本作は第８５回アカデミー賞作品賞、主演女優賞など５部門にノミネートされたもの、監督賞にはノミネートされていない。これは、『ハート・ロッカー』によって、女性監督初の監督賞を受賞したことが影響したのかもしれないが、私としては１９５１年生まれ、私より２歳若いだけのビグロー監督が、遺骨を越えて、こんなテーマに挑戦したことに拍手！

＜ＣＩＡはやはり不可文！その予算は？人員は？＞

プレスシートの中には、軍事シーナリスト黒井文太郎の『ＣＩＡｖｓアルカイダ「１５年戦争」』というコラムがある。それを読めば、クリントン政権時代にＣＩＡは「冬の時代」に入り、予算と人員が大幅に削減されたが、９・１１アメリカ同時多発テロを受けて、ブッシュ大統領は即座にＣＩＡを大幅に強化し、アルカイダの殲滅とビンラディンの追跡を命じた、という流れがよくわかる。テロとの戦いは「情報戦」だから、本作の主人公となるＣＩＡイスラマバード支局ビンラディン追跡チーム情報分析官のマヤ（ジェシカ・チャスティン）のような仕事が不可欠だ。彼女もＣＩＡテロ対策部門の紹介で新規採用され、そこから現地支局へとたった分析官の一人らしい。

アルジェリア人事事件では、１月２５日安否不明だった日本人１０人全員の死亡が確認され、遺体が日本に戻ったが、この事件について日本政府は何もできなかった、今後もほとんど何もできないはず。安倍政権が１２月２６日に発足したことによって、集団的自衛権の解釈や自衛隊の役割について新たな問題を提又るであろうことは確実だ。アフリカや中東さらに南アメリカはもとより、北朝鮮や中国との「外交」について、日本でもＣＩＡに相当する諜報機関が必要と思う。ちなっも、情報収集のための諜報の「諜報（ｓｐｙｉｎｇ）」の活動はこういた文法は秘錄の声がとぶったのは当然だが、その反面きわいごとがかりでも・・・？

＜「冷血」は「容人」と同じ意的四字！＞

そうは思うものの、本作鑑賞ではリアルに描かれるパキスタン・イスラマバードにあるＣＩＡ秘密施設における、ビンラディン追跡チームのリーダーであるダニエル（ジェイソン・クラーク）は、金の運び屋として運輸さ れ諜報になっている男アンマル（レダ・カテブ）の「尋問」の標子を見ていると、やはりぞっとする。２００３年に行われているの尋問に立ち会ったマヤが「水責め」の仕絶ごに思わず目を背けたため、ダニエルがジョセフ・ブラッドリー支局長（カイル・チャンドラー）に対して「若すぎませんか？」と不安な気持を伝えると、支局長の答えは単純にも「あ奈見ろて、冷血だそうだ」というもの。

ちなみに２０１１年７月２６日に中国初のユーロメル文学賞受作賞となった関貴氏と対談し、彼から「ボ和元年の日本人」と書かれた「書」をプレゼントされたが、ここでいう「容人」は書の言葉。それと同じように、支局長がマヤに向かって述べた「冷血だそうだ」もここでは同じに書め言葉だ。まず、そのことをしっかり頭にたき込んだうえで、本作を鑑賞する必要がある。

＜「旧を守る」は、こんな強情なお爺！＞

「尋問する側」と「尋問される側」はどちらが大変？その答えは当然決まっているが、何年間にわたってこの諜報の現場で続けてもなかなか有効な成果が得られないことに心が折れていくのが、リーダーのダニエル。彼の部下として、尋問する側と尋問される側の大変だということがよくわかる。他方、膨大な量の情報と日々「格闘」し、「アブ・アフメド」という男の写真を中心にビンラディンとの関係を探り続けたマヤも、ブラッドリー支局長から「本名も居場所もわからないは、役立たずの情報だ」と一蹴されたから、ストレスはたまるばかり。

このように、ビンラディン追跡チームの成果が何もしがらないや中、②２００４年５月２９日、サウジアラビアで外国人を狙ったテロが勃発。②２００５年７月７日、ロンドンで地下鉄・バス爆破テロが勃発。さら に、③２００８年９月２０日、ダニエルが去った後、惨かたちとして尋問と分析のつながりはみ ボ小ボロになっていくマヤを心配した同僚のジェシカ（ジェニファー・イーリー）の紹介によって、イスラマバードにあるマリオット ホテルで食事しようとしている時、この２人は爆発テロ事件に巻き込まれることに。まし、③アルカイダの幹部であるヨルダン人医師パラウィチ、大金と引き換ゆえにビンラディンを裏切るという情報を得たジョルジ ア、喜々としてパラウィとの接触をはからうとした２００９年１２月３０日、パラウィの自爆テロによってジョルジ ア自身のＣＩＡ局員７名が即死するという事件が発生。さらに、③ある日には、自宅から車で出発しようとしたマヤに対する直接的なマシンガンによる攻撃まで・・・。

そんなこんなの映像を見ていると、ＣＩＡのビンラディン追跡チームの一員として取り組 んでいるのに、何もくいっ ぱ弾ない、これは職性の上に居立たっていることを痛感。さて現在の日本人に、こんな気概をもった若者はーゆ ぎ ィは はいるのだろうか？

＜この執念がこの成果を！しかし、その後の決断は？＞

マヤの情報分析官としての仕事はビンラディン捕縛チームがはじめてだが、ダニエルが本部に戻ったら、マヤの「アブ・アフメド」追及への執念はかなり狂気に近いものになっていた。そんな中、２０１０年５月１日に発生したニューヨークでの爆破テロ未遂事件を受けて、ビンラディンの追跡より目の前のテロ対策を重視するようになったブラッドリー支局長に対して、マヤは激しく対立したうえ、ブラッドリー支局長が嫌然とする ほどの迫力で「今すぐ私にチームをください」と詰め寄る姿は迫力十分だ。

そんなマヤの執念に呼応するかのように、ＣＩＡイスラマバード支局の現地チームリーダーであるラリー（エドガー・ラミレス）は、危険地帯での無謀なまでの追跡を重ね、「アブ・アフメド」が乗る白いＶＩＰ車を捉えたことから局面は大転換していく。そして遂にラリーは「アブ・アフメド」が出入りする、アボッタバードの家部を突き止めることに成功！その家部は外部から情報を集められないようプロ仕様でカ ードはされているうえ、そこで暮らしている男女の人物像を探っていくと、まさにここにビンラディンが潜んでいる可能性が高い。ビンラディンの隠れ家については、③周囲数２０都会級の周辺がありところ、マヤの判断は、周囲ではアルカイダ全体の指揮をとるのは不可能だから、まちがいなく都会だ、というもの。すると、まさにビンラディンのターゲットの最新こそビンラディンの潜伏先に違いない、そう確信したマヤはＣＩＡテロ対策センターのアフガニスタン、パキスタン部チーフのジョージ（マーク・ストロング）に強く意見具申し、ジョージもマヤの意見にたなびく様ったが、問題はその後の手続き。どれだけ確実な情報が集まれば、このガビンラディンの潜伏先を確定し、攻撃に踏み切れるの？

＜「決断」の あり方とは？＞

本作のクライマックスは、『ネイビーシールズ』（１２年）でほぼの知ったアメリカが誇るネイビーシールズ（『シネマルーム２９』１２６頁参照）による突入作戦。２０１１年５月１日に現実に実行されたネイビーシールズによるビンラディン捕縛作戦については、私たちはニュース映像でよく知っているが、さて本作が描くビンラディン捕縛作戦は？それはおなじ自身の目でじっくりと確認してもらいたいが、私がそのクライマックス以上に興味深かったのは、同作戦実行に至るまでの「決断」のあり方だ。

「１３ディズ」（００年）では１９６２年のキューバ危機に対抗するケネディ大統領の「決断」がテーマとされた（『シネマルーム１３ ６３頁参照）が、さてオバマ大統領はビンラディンの遺体あるいは殺害のための作戦決行について、いつ、いかなる決断を？大統領の決断に至るまでさまざまなレベルでの「決断」があるのは当然だが、その最初のレベルはＣＩＡ長官レオン・パネッタ（ジェームズ・ガンドルフィーニ）の報告（ブレゼン）、ジョージの部下のスティーブ（マーク・ブラゼウス）による模型を使用しての説明が無にして最を煌いているのはまずだが、そこでのマヤの口出しが面白い。後方（外野席？）から眺 めたり眺 めたりで、長官がＷ手をとり「おまえは誰だ」と問うと、マヤは「屋敷を見つけたクソッタレです」とタンカを切った（？）が、さてその是非は？

＜本作にみる「決断」は？＞

ホワイトハウスから「大統領に証拠を見せろ」というパレッシ要求されても、秘密保持の要塞のようなあの家部については、内部の写真撮影が無理なら、住民たちのＤＮＡ採取も不可能。これでは「この家部にビンラディンが潜伏していることについて、こんな確定的な証拠があるから攻撃せよ」という命令を下せないのは当然だ。屋敷を見た後２１日間ようでも決断ができないや、間立ったマヤはジョージの執務室のガラスに声のサインペンで「２１」と殴り書きしたが、その後１００日を過ぎてもむなくく日は過ぎていくばかり。そして１２９日が過ぎる中、大統領の直訴を決めたパネッタ長官はついに自分の最終判断を下すべくビンラディン潜伏の確率をチームの面々に尋ねたが、そこでの答えは６０％～８０％がせいぜい。その中で「諸事情」に陥り、後からの「歴史の検証」に耐えないはならないことを考えれば、それぞれの部門の責任者として１００％、９５％と言えないことは明らかだ。ところが、ここにみる驚くべきマヤの大胆な放言は？

本作はホワイトハウスにおける「大統領の決断」がいかなる状況下で下されたのかは描かず、あくまでマヤを中心にその決断のあり方に迫っている。しかし、２０１１年５月１日ジャルが待機するアフガニスタンの前線作戦基地に乗り込んだマヤの携帯に、ジョージからの「電話」で「あなた決断を迫られることは明らかだ。今夜だ」というその、「決断」に「確率」という要素が不可なことは一方の異理だが、他方で「確率」だけで決断できないのも異理。マヤの「信念」にどこまで依頼してよいのかは難しい問題だが、本作を観ていると「決断」も結局最後は人間の「直感」によるものだということがよくわかる。

日本は今、経済政策を中心として多くの「決断」をしなければならない時期だが、近い将来関隆義島根県知事にでも「あ る決断」を迫られることは明らかだ。そんな時、誰が、どんな情報にもとづいて、どんな「決断」を？

＜私の「決断」では、作品賞、主演女優賞はズバリこれ！＞

第８５回アカデミー賞のノミネートが２０１３年１月１０日に発表されたが、今年も巨立つのはそこにギャ力配給作品の多いこと。これはギャ力の担当者の慧眼脱がよほど優れていることを物語るものだが、１月２４日に試写室で観た「世界にひとつのプレイブック」（１２年）とまた作品２本とも作品賞と主演女優賞その他にノミネートされた傑作だ。ちなみに最多は１２部門にノミネートされた『リンカーン』（１２年）だが、同作は主演女優賞にノミネートされていない。

作品賞はノミネートされた作品１０作が選ばれ、『リンカーン』をはじめまだ観ていない作品がたくさんあるから、それな不十分な情報 で、私の「相手 測＝「決断」をするのは、ちょっと無謀だ。ただ、作品賞と主演女優賞についての私の「決断」は本作！作品賞の「決断」については、私たこのような台無慧結脱ぶりが大好きいっこともあるが、何よりもこんなテーマに挑戦したあの作に敬意を表しているから。また主演女優賞の「決断」は、ここまでギリギリの緊張状態に追いつめられながら、諦めることなく自分の任務に集中したラ、その信念を貫くことによって上部ひいては大統領の決断にまで大きな影響を与えたマヤという女性情報分析官をジェシカ・チャスティンが見事に演じきっているから。「予想」とは、本来当たるも八卦、当たらぬも八卦の世界だが、作品賞と主演女優賞については今日私は断固そんな「決断」を！

２０１３

（平成２５）年１月２６日記